

SRID キャリア開発

国際開発研究者協会 (SRID: Society of Researchers for International Development) は、国際開発関連機関 (国際機関、政府関係機関、NGOs、開発コンサルタント企業等) で働く事を希望する人達のキャリア開発を支援するため、カウンセリング、能力開発・向上研修等の**キャリア開発事業**を実施しています。その一環として、キャリア開発事業受講生や国際開発関連機関への就職を目指す人達にキャリア開発に関する情報を提供するため、『SRID キャリア開発』を年2回3月と9月に配信しています。国連機関、世界銀行(世銀、WB)、アジア開発銀行(アジ銀、ADB)、アフリカ開発銀行(AfDB)、欧州復興開発銀行(EBRD)、国際協力機構(JICA)、開発コンサルタント企業等の国際開発関連機関に勤務経験のあるSRID会員の知見とネットワークを活かし、SRIDならではの情報を発信しています。第3号では、開発途上国支援で重用な役割を果たしている、開発コンサルタントに関する特集を組みました。

途上国開発コンサルタントに求められるもの

JICA、外務省、世銀を経験された後、アイエムジーという、開発コンサルタント会社を起業し、「カイシャ組織に馴染まない自分には天職」として、チャレンジングな仕事に毎日挑戦されている、森真一 SRID 会員からのメッセージです。



森 真一 (もり しんいち) 有限会社アイエムジー (<http://imgpartners.com>) 代表取締役。
1988年東京大学教養学部教養学科卒。JICA 社会開発調査部勤務、外務省経済協力局無償資金協力課出向後に JICA を退職し、イエール大学経営大学院修了後、1994年世界銀行入行。アフリカ局 中央アフリカ・インド洋部 工業・エネルギー課で2年間勤務したのち、1996年に有限会社アイエムジー設立。中小企業振興、中小企業金融、農業金融、農業バリューチェーン開発、公共セクターの経営改善を専門とする。SRID 会員。

【これまでの職歴】 私は1988年に大学の新卒でJICAに入り、交通インフラや地域開発のマスタープラン作成やフィジビリティ調査をコンサルタントに委託して実施する社会開発調査部に配属されました。3年後、外務省の無償資金協力課に出向を命じられ、エジプトやイエメン、エチオピアなどの無償資金協力の案件選定を担当することになりました。しかしながら、白は白、黒は黒としか言えない性格の私には、「不要」としか思えない、プロジェクトの開発目的・効果等の本質にはあまり関係のない様々な点に配慮を迫られる外務省の仕事は全く合いませんでした。その結果、頭痛と肩こりに悩まされ、殆どノイローゼ状態に陥ってしまいました。JICAに戻してもらうことも可能でしたが、JICAの「親会社」たる外務省から逃げて帰ってきたような烙印を押されるのも癪だったので、そのまま外務省/JICAを退職して米国イエール大学の経営大学院に留学し、MBAを取得して世界銀行に応募しました。

世界銀行にはヤングプロフェッショナルプログラム(YPP)という若手職員の登竜門があったのですが、英語で堂々と自らをアピールできなかった私は面接で落とされてしまいました。しかし、幸いなことに世銀の日本人先輩職員の推薦を得て、当時の日本の大蔵省(現財務省)が

世銀に抛出していたトラスファンドを使って、世銀アフリカ局に拾ってもらうことができました。大学時代から第二外国語であるフランス語に真面目に取り組んでいたこともあり、世銀では、フランス語圏アフリカの金融セクターの改革や公共サービスセクターの民営化などに2年間従事することができました。当時、私は何とかして世銀の正規職員になるための道を探っていたのですが、一緒に仕事をしたカナダ人のコンサルタントが、世銀の正規職員のポジションをオファーされたにも関わらず、「コンサルタントであれば、通勤もしなくてよいし、報酬も高い。現場の仕事が基本で、世銀職員と違って事務処理も殆どせずに済む。」と言って辞退したことを知り、「目から鱗が落ちて」日本に帰国してコンサルタントを始めることにしました。当時は日本のコンサルタントで国際機関の経験のある人は多くなかったので、そういった経歴を引っ提げて日本に帰れば競争に勝てるだろうという目論見もありました。

【開発コンサルタントの仕事】 33歳で日本に帰った私は一人でコンサルタント会社を立ち上げました。大学院で学んだ経営学の知識と、世銀で学んだ金融と公共セクター改革の知識をもとに、中小企業振興・金融、公共セクターの改善に始まり、さらには、農業金融やアグロインダ

ストーリー、そして農業バリューチェーンの仕事もできるようになり、社員も 15 名にまで増えました。開発コンサルタントの醍醐味は、常に新しいものを(半ば迫られて)学び続けることであり、私のように 60 歳近くになっても「今年の私」は「去年の私」よりも能力が伸びていることが実感できる、知的好奇心が満たされる職業だと思っています。逆に言えば、学び続けなければ世の中の役に立たなくなり、また競争にも勝てなくなってしまう、厳しい職業であるとも言えます。しかし、そもそも「途上国の人達の役に立ちたい」と思って始めた仕事なのですから、こうして勉強を続けることは全く苦になりません。さらに、競争力をつけて仕事を多く受注できれば報酬も比例して増えていきます。知的にも金銭的にも全ては自分に返ってくる「自己責任」のコンサルタント業は、カイシャ組織に馴染まない自分には天職だったと言えます。

開発コンサルタントとして、これまで興味深いプロジェクトをいくつもやってきましたが、例えば、アジスアベバにあるアフリカ連合事務局やナミビア貿易産業省の事務手続き改善のプロジェクトなどは特に興味深く、学びも多かったです。



アフリカ連合委員会におけるワークショップ (2016 年) 森真一

途上国政府の事務手続きが回らないのは、個々の職員の能力が低いとみられるか怠惰だからというケースはむしろ少

なく、事務を効率よく流すシステムが組織の中に存在していないためが殆どであり、誰もがフラストレーションを抱えているのです。そこで、我々コンサルタントが手続きを一つ一つ追いかけて、どこにボトルネックがあって事務が止まっているのか明確にしてそれぞれ対策を講じれば、結果的に事務がスムーズに流れていくようになるのです。こうしたことは、「問題を発見して改善する」ための強い意思とコミュニケーション能力があれば出来ることです。開発コンサルタントの仕事は、技術的な専門性もさることながら、「観察・分析によってギャップを見つけ、自分の頭を使ってその解決方法を探る」ことの繰り返しだと思っています。

【日本のコンサルタント業界の問題】 日本の多くのコンサルタント会社が、発注者である JICA の顔色を見ながら仕事をしていることに、私は不満を感じています。開発プロジェクトは複雑で、それらのプロジェクトを形成したり実施したりするために必要な専門性や現場の知識やコミュニケーションスキルを全ての JICA 職員が十分に持ち合わせている訳ではありません。

その限界の中でコンサルタントに業務を発注するわけですから、JICA の考え方やアプローチが常に正しいという保証はないのです。また、プロジェクトは「生き物」ですから、時間とともに状況が変わる、あるいは新たな事実が発見されることはいくらでもありますから、その変化に応じてコンサルティングの内容も変化させなければ、効果・インパクトが限られたものになってしまい、結果的に日本国民の税金が無駄に使われてしまうことになってしまいます。したがって、誤っていることは「誤っている」とはっきり指

摘することが、日本の ODA では極めて重要ということになります。しかしながら、JICA に忖度しているのか、はたまた自分の能力に自信がないのか、言うべきことを言わないコンサルタントが非常に多く、これは極めて嘆かわしいことです。



セネガルで稼働している粉殻燃料製造機械(2022 年)森真一

【実践から学ぶことの重要さ】 我々民間セクター開発のコンサルタントが、「絵にかいた餅」ではなく、現実にも根ざした提言をするためには、自ら投資をしてその結果から

学ぶことが欠かせないと思っています。私の会社では、コンサルタント業で儲けた資金を用いて、インドネシアの南スラウェシで高原野菜を契約栽培で育てて冷凍加工して日本に輸出するプロジェクトや、日本の技術を用いてセネガルのコメの籾殻から燃料を作り出して販売するプロジェクトなどを、自前で実施しています。これ以外にもいろいろな投資を試みており、失敗例もたくさんありますが、投資で得られた教訓がコンサルティング業に直接役に立ち、またコンサルティングで得た知見を投資の現場に活かすことが出来るという相乗効果があります。

【まとめ】 上記のように、外務省に出向させられたことをきっかけにして、私は JICA 職員としてのキャリアから外れて、現在に至りました。外務省出向時代は、精神的にボロボロで「人生のどん底」でしたが、JICA を辞めて「失うものがない」状態にまで一旦追い込まれたことが、今の自分の強さの源泉であるように思います。ピンチがチャンスを生む、ということが言われますが、まさにそれによって、今はこんなにチャレンジングなことに毎日楽しく取り組んでいます。人生には無数の道があるわけですから、やりたいことにとにかくチャレンジすることが大切だと思っています。

若手開発コンサルタントに聞く： 「専門性を磨くべき」

商社勤務を経て、OPMAC 株式会社の上席コンサルタント (<https://www.opmac.co.jp/>) として海外の現場で活躍されている、若手開発コンサルタントの中川和広さんに、開発コンサルタントの遣り甲斐、公私にわたるチャレンジ等についてお話を伺いました。

大学時代から OPMAC に入社されるまでの経緯を聞かせてください。

大学時代には、将来開発の仕事をしようという明確な意識はありませんでしたが、興味深い国際経済の講義を受講したことがきっかけとなり、国際的な事に関心を持つようになりました。その講義をしてくれた恩師の影響もあり、アメリカの大学院に留学しました。帰国後、機械関係の専門商社に就職し、発電所建設事業の契約管理を行うセクションに配属されました。3 年ほど、東京の本社で仕事の基礎を学び、インドネシアのジャカルタに 2 年半駐在し、コントラクターの立場で円借款による発電所建設事業 2 件などの契約管理を担当しました。



中川和広（なかがわかずひろ）上席コンサルタント、OPMAC 株式会社。
約 5 年半の商社勤務を経て、2012 年より OPMAC に入社。商社勤務時に約 3 年間インドネシアに駐在し、円借款の発電所建設事業の契約管理に従事した。この経験を活かし、OPMAC でもバングラデシュ、ミャンマーなどを中心に、円借款事業の調達等実施促進業務に携わる。その他、円借款事業の準備調査業務、事後評価業務などにも従事。
埼玉大学教養学部卒業、カリフォルニア大学サンディエゴ校環太平洋国際関係大学院修了。

ジャカルタ勤務を終え、本社に戻ったのですが、また遣り甲斐のある海外の現場で働きたいと考えていました。そんな時、大学時代の同期で OPMAC のコンサルタントとしてバングラデシュに駐在していた友人から、彼の後任を務めないかとの誘いがありました。正直言って、諸待遇面では商社の方が良かったことは事実でしたが、大変なこともあるものの、すごく遣り甲斐のある、海外の現場で、再度働きたいという気持ちを強く持っていました。また、商社の仕事はあくまで、開発=ビジネスの視点で行われるため、実施機関と利害関係が一致しないこともありました。私は、より開発途上国に寄り添いながら、その国の発展のための仕事がしたいと思い、OPMAC への転職を決めました。

商社から OPMAC に移り感じられたことはどんなことですか？OPMAC ではどのような、お仕事をされていますか？特に印象に残るプロジェクトや仕事がありましたら、教えてください。

まず、商社と OPMAC の企業文化が全く違うということに驚きました。商社は大企業であり、マネジメントや上下関係が組織的で、個人の名というより、会社の名を背負って仕事をしている感じでした。一方 OPMAC はスリムな組織で、責任をとって仕事の成果を上げている限り、厳しいけれど個人の主体性が尊重され、あまり組織的な拘束は受けない、自由な雰囲気職場だと感じました。

OPMAC の初仕事は、JICA バングラデシュ事務所のインハウス・コンサルタントとして、実施機関の円借款手続きを支援する仕事で、貸付管理やプロポーザル招請

状作成のサポート等の仕事をしました。商社の時は、あくまで、実施機関とコントラクターの関係でしたが、バングラデシュでは、実施機関の人達ともっと近い距離で仕事をすることが出来ました。OPMAC の大先輩と組んで、円借款の手続きの詳細を学ぶことが出来たのはいい経験でした。バングラデシュの仕事の後、ミャンマーの新首都ネピドーで、建設省や、電力エネルギー省、ミャンマー国鉄を始めとする色々な実施機関の円借款事業の支援業務を担当しました。これらの経験を通じて自分の業務責任及び範囲が広がり、現在はエジプト、タンザニア、インドなどの様々な国での業務を担当しており、仕事もより充実し、さらに楽しくなっています。

開発コンサルタントとしていい仕事をするためには、どのような能力が必要でしょうか？

まずは、頭を使い、手を使い、体を動かし、クライアントの為に、役に立つ具体的な成果をあげることが大切です。また、現場では、想定したとおりに物事が進まないことが多いので、柔軟に様々な問題を解決していく対応能力が大事です。私は専門分野が明確な工学系コンサルタントではなく、文系のコンサルタントなので、自分の専門性は何なのか、売りは何なのかをはっきりさせることが重要だと思っています。また、クライアントに、物事を分かりやすく説明する能力も大切です。何故なら、クライアントが私の提案を本当に理解できないと、彼等の上司や監督官庁を説得できなく、その結果、事業が滞るリスクがあるからです。

公私にわたり開発コンサルタントとして大変な事、苦労する事はありますか？

何といっても、ワーク・ライフ・バランスをどうとっていくかです。1年の殆どを海外で過ごしているため、家族と過ごす時間を作ることが非常に難しいです。6才と4才の子供がいますが、彼等の成長をしっかりと身近で見ることができないのはとても残念です。ただし、コロナ危機のこれまでの2年間では、海外出張が少なくなり、在宅ワークで家族と過ごす時間が増えました。コロナ危機を機会に働き方が変わったとともに、ビデオ通話が発達したので、家族と頻りに Online で交流できる様になりました。しかしビデオ通話をする之余計家族に会いたいと思います。



バングラデシュでの母子保健事業視察(2014年)
中川和広

仕事面では、工学系のコンサルタントと違い、コンサルタントの初期のころは、自分の専門分野を聞かれても明言できないことがあり、経験を積むまで、辛い思いもしました。今では円借款事業の仕組みに精通したプロジェクトマネジメント及び調達に専門家とし

て、クライアントたる実施機関に対して、例えば、事業実施をめぐるトラブルが生じた際に、契約上どの条項を適用し、どのような対策を取るべきか等、アドバイスができるようになりました。しかし、円借款事業で用いられる契約約款やガイドライン等は、適時改訂が行われるので、絶えず知識のアップデートをしなければなりません。

仕事に関する今後の抱負をお聞かせください。

これまでは事業監理や実施支援を担当してきましたが、今後は新規案件の形成をもっとやりたいと思っています。今まで培ってきた円借款事業のプロジェクトマネジメントや調達業務の専門性を活かして、新規案件形成時に事業のよりスムーズな進捗が見込めるスキームや仕組みを提案していきたいです。開発コンサルタントは、様々な国で様々な人と仕事ができる遣り甲斐のある職業です。今後も自身の専門性を強化して、「中川だから仕事をお願いしたい」と言われるようなプロフェッショナルになりたいと思っています。



ミャンマーで実施した調達セミナー(2017年)
中川和広

最後に開発の分野でキャリアを積んでいこうと考えている人達にアドバイス、メッセージをお願いいたします。

開発の仕事と一言と言っても、色々な仕事とそれぞれの立場があります。例えば、JICA、国際機関、開発コンサルタント、コントラクター、NGO 等が挙げられます。立ち位置が違えば、仕事の内容も、開発途上国の政府、実施機関、途上国の人達との接し方も大きく違ってきます。まず、自分が何をしたいのか、何に成りたいのか、色々な立場の方から情報収集しつつ、よく考えてください。開発コンサルタントになりたい人は、専門性を持つことが重要なので、自分の売りは何なのかをよく見極め、その能力を養ってください。専門性がなければ、仕事を取ることも難しくなります。ロールモデルとなる方がいるのであれば、その方の仕事のやり方を注視しつつ、指導を受けながら、勉強していくという方法もあります。

一言アドバイス

SRID 会員からの開発コンサルタントを目指している人達への一言アドバイスです。

- 開発コンサルタントに限らず、嘘をつかないこと、つまり誠実であることが「人として」求められています。常に「見られている自分」を意識してください。柴田英知
- その国の歴史や文化を尊重し、多様な選択肢の中から最適解を提案する。たえず専門性を磨いて、

人間としても成長したい。高津俊司

- 途上国の人々は、わたしたちの協力に感謝しますが、内心では「いつかは外国援助に頼らず、自立したい」という思いを静かにたぎらせているのです。福田幸正
- 常に住民の生活向上という事業目的達成を第一として、事業主と援助実施機関の間の連携、調整に務めることが重要。担当事業の効果発現に必要な最新技術、ノウハウの習得と、その実施機関への伝達に常に努め、そのための関係者とのネットワーク形成を怠らないこと。不破吉太郎
- 専門知識を駆使し、問題の客観的な状況分析に基づく実現可能な解決策を提案し、政府、実施機関、影響を受ける住民、開発援助機関、NGOs 等、プロジェクトやプログラムに関わる全てのステークホルダーの立場をよく理解し、クライアントによる解決策実施を、誠心誠意支える。鈴木博明

ツールボックス:パレートの法則

SRID キャリア開発第1号、第2号では英文校閲のソフトや App を紹介しましたが、第3号では、仕事を効率的に進めるための、経験則に則った、考え方を紹介します。

イタリアの経済学者パレートは富の分配を統計的に分析し、富の偏在(8割の富が2割の富裕層に集中し、残りの2割の富が8割の低所得者に配分されている)を発見しました。これはパレートの法則とよばれてい

ます。パレートの法則は経済以外にも自然現象や社会現象など、さまざまな事例に当て嵌められることが多く、自然現象や社会現象では一部が全体に大きな影響を持っていることが多いと解釈されています。ビジネスの世界でも、仕事の成果の8割は、費やした時間全体のうちの2割の時間で生み出されると言われています。プロジェクトにしる、調査研究にしる、全体の2割の時間を投入すれば、仕事の8割まで完成させることが出来るという、経験則です。

職場では、殆どの人達が複数の仕事を任されます。複数の仕事を効率よくさばくためには、一つの仕事を完璧に仕上げたから、次の仕事に取り掛かるよりも、2割の時間を使って、まず、100点満点のうち、80点の取れるところまでできたら、一旦棚上げして、他の仕事に取り掛かり、同様に80点レベルまで仕上げていき、このように、自分の持っている仕事を80点レベルで概ね片付けてから、残りの時間を、仕事の締め切り期限や重要度に応じて使い、順次完成させていくという方法が効率的です。

例えば、出張報告を上司に提出する時、一番大切なことは、要点を1ページぐらいにまとめることです。どんなに、複雑なプロジェクトでも、会議でも、上司に報告し、その決断を仰がなければならない事は、1ページもあれば十分カバーできます。2割の時間を使って、この要点を書いてしまえば、あとの部分は、要点の詳細説明や補足部分であるので、自分の持ち時間を考慮して、その範囲内で仕上げれば十分です。多忙な上司は、要点の箇所はしっかり目を通しますが、後の部分

は必要があれば、さっと目を通すだけです。どんな仕事でも、まず、8割仕上げてしまえば、精神的にも楽になります。色々な仕事の中には、80点レベル以上の完璧さは求められないものもあります。

また、完璧に仕事を100点のレベルまで仕上げても、どんどん状況は変化していくので、仕上げの段階でやり直しが必要となることもあります。忙しい、ビジネスの現場では、決まった時間と予算の中で、出来るだけ多くの結果を出すことが要求され、それが職場での評価につながります。ビジネスの世界では、「Done is better than perfect. 完璧を目指すよりまず終わらせろ!」とよく言われます。公私にわたり、多忙な時間を過ごされている皆さんは、がむしゃらに仕事をするのではなく、パレートの法則を適用し、選択と集中を心がけて下さい。(鈴木博明)

ご案内

SRID キャリア開発カウンセリング

SRIDでは、留学準備、進路相談、国際機関への応募方法CVの書き方、インタビューの受け方、要求される能力、採用後のキャリア開発について助言する等のカウンセリングを無料で行っていきます。大学生や高校生の方で、将来開発途上国の貧困解消や地球温暖化対策等の世界的課題の解決に貢献したいと漠然と思っているが、そのためにはどんな職業の選択肢があるのかを知りたい方も歓迎いたします。SRIDホームページにある、下記のSRID キャリア開発事業申請書にご記入の

上お申し込み下さい。[SRID キャリア開発事業 申請書 \(fc2.com\)](#)

第3回国際開発分野で働く女性フォーラム

オンライン懇談会を2022年11月5日(土) 日本時間午後8時-10時に開く予定です。今回は国連人口基金、アジア開発銀行東京事務所長を経て現同行本部の副官房長としてご活躍されておられる、児玉治美氏をお迎えし、子育てをしながらいかに国際機関を昇進・転職されてこられたかお話し頂きます。その後、参加者の方々も含めた懇談会を行います。本女性フォーラムは女性限定参加です。本懇談会に関するお問い合わせはSRID会員森田宏子(hiroko.morita.lou@gmail.com)にご連絡下さい。

国際開発関連機関のキャリア関連情報

採用、セミナー、研修、履歴書の書き方、面接の受け方等の有益な情報が財務省、外務省国際機関人事センター、各国際機関等のどのウェブサイトに掲載されているかを整理した、[国際開発関連機関のキャリア関連情報](#)をSRIDのHome Pageで提供しています。

入会のお誘い: SRIDでは会員を募集しています。ご興味のある方は「[入会のお誘い](#)」をご覧ください

編集後記

開発の主なステークホルダーを車の4輪に例えることができるのではないのでしょうか。

先ず、一番大切なのが国民と彼らの自立相互扶助の精神と気質。次に国民の生活を支え、国民一人一人の希望を叶えることの出来る、政治、経済・社会制度を提供・維持する政府とそのガバナンスが挙げられます。この両輪がうまく噛み合っていれば、その国は成長に向かって前進していくと思います。ただし、開発途上国では資本や技術の蓄積が限られているので、国連機関、MDB(多国籍開発銀行)、JICA等の援助機関や海外の民間企業がそれらを提供します。

2輪車が3輪車になり、開発が加速します。援助機関は職員の数も限られており、政策、プロジェクトの支援は、開発途上国の政府/実施機関による実施を監理する形で行われます。政策やプロジェクトが想定した通り実施されなければ、期待した成果は上がりません。開発コンサルタントは、開発途上国の政府や実施機関に寄り添い、現場の視点から、政策やプロジェクトの形成及び実施を支えます。開発コンサルタントが第4輪として加わることで、開発がさらに加速します。

SRIDのキャリア開発事業ではキャリア開発の多様性に注目しています。[SRID キャリア開発第1号](#)では、国際開発の世界で仕事をするためには、国際機関以外にも様々なキャリアパスがある事を説明しました。開発コンサルタント以外にも、NGO、NPO、民間企業、教育・研究機関が、援助機関に出来ない、資本や技術の提供を行っています。[SRID キャリア開発第2号](#)では、国際開発分野で働く女性のキャリア開発に関する特集を組みました。SRID キャリア開発は今後も、国際開発に関わる様々な仕事に関する情報を発信していこうと考えています。(鈴木博明)